

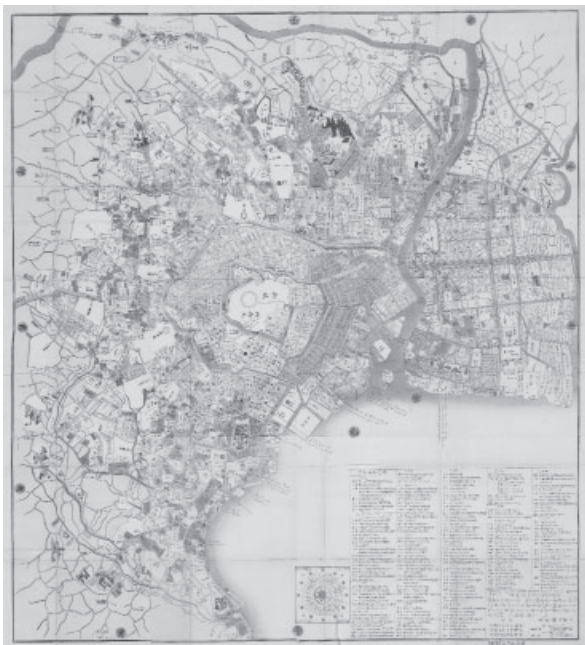
国立歴史民俗博物館の愉悦<sup>20</sup>

# 萬延改正御江戸大絵図

万延元年（1860）

昨年、アメリカ・ミネソタ州の古書店で出品され、縁あって国立歴史民俗博物館に収蔵されることとなった古地図がある。元禄九（一六九六）年の旧版を元に、文政補改、天保再版と版を重ねた『御江戸大絵図』の萬延改正版（高井蘭山図、版元は御書物師出雲寺萬次郎・書林岡田屋嘉七）である。この幕末の江戸図は、日本国内で他に東京国立博物館や国際日本文化研究センター等に所蔵があるが、本図には独自の特徴がある。地図の題簽や余白に、同時代に書き込まれたと見られる、英語の手書きメモが複数見出されるのである。

まず題簽には、地図本体の余白に見られるものとは別の筆跡で、  
 「J.C.P. de Krafft, U. S. Navy- Jeddo, Nov. 16th, 1861-...From [?] Hond [Honored?] Townsend Harris, U. S. Minister」とある（右下図）。米国公使（正しくは弁理公使）タウンゼント・ハリス氏から、表記の米国海軍軍人が、江戸で一八六一年十一月十六日に贈られた、という趣旨の書き込みと読み取れる。ドウ・クラフトの名前を米国海軍局の人名録で調べると、John Charles Philip DeKrafft という名の十九世紀の米国海軍将校（一八二八—一八八



*Obaque, San or Grand Temple  
 + Central Park, where the Japanese  
 misters + dancing girls perform.*

五）が見出される。経歴によれば、彼は一八四六年から一八六〇年にかけて様々な米国軍艦に乗り組んで地中海や太平洋などを巡航し、一八六一年四月に母国で南北戦争が勃発した折には米艦ナイアガラ号にあって、同年十一月二十二〜二十三日にフロリダの南軍要塞の攻撃に参戦した。とすると同じ月に彼が江戸にいたはずはない。しかしナイアガラ号は、渡米を終えた幕府の遣米使節団を日本に送り届けるために、その前年の十一月九日から二十日にかけて江戸に來航し、同号の将校たちはその間、街に上陸して、ハリスら米国駐日代表部や幕閣らの歓待を受けた。題簽のメモにある一八六一年が一八六〇年の書き間違いだとすれば、つじつまはすつきりと合うことになる。

地図本体に見出されるのは、別の手による、江戸の一連の場所の説明書きである。米国・英国・フランスの駐日公使館の所在地を、それらが設置された寺の名前とともに記し、またナイアガラ号が停泊した芝・田町の外国人上陸場、「御大老」（井伊直弼）が襲撃された桜田門外、街道の出発点としての日本橋、「大君の廟所」としての増上寺、それに当時江戸で外国人に人気のあった観光地——「力士や踊り子らが演技をするセントラルパーク」浅草寺（上図）、「立派な茶屋」のある王子、「街の眺めが素晴らしい」愛宕山など——ほかを、矢印とメモで示している。その筆跡は、筆者がこれまで研究で目にしてきたハリスの筆跡によく似ており、彼自身による書き込みの可能性も低くない。

いずれにしても、西洋人のメモが付された江戸の古地図自体、類例がなかなか見当たらないものであり、幕末に江戸を訪れた西洋人の視点を併せて映し出した、また当時の色刷りを鮮明に残す江戸絵図として、稀少な資料と言える。

